

2012年度 卒業論文

地域社会は孤独死のセーフティネットとして機能できるか
—孤独死から地域社会の希薄化の打開策を探る—

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系 4年
浦野ゼミナール所属
1T090758-1

服部 哲朗

目次

1章：はじめに

- 1-1. 問題意識
- 1-2. 研究内容、目的

2章：孤独死の基礎研究

- 2-1. 孤独死とは
- 2-2. 孤独死の歴史
- 2-3. 孤独死の現状

3章：孤独死問題から見た地域社会の変容

- 3-1. 単身世帯の増加
- 3-2. 村落的生活様式から都市的生活様式の転換
- 3-3. コミュニティの変化、近所づきあいの減少
- 3-4. 格差問題

4章：地域社会の孤独死対策（松戸市常盤平団地を中心とした事例研究）

- 4-1. 常盤平団地とは
- 4-2. 常盤平団地で起きた孤独死
- 4-3. 孤独死への取り組み

5章：孤独死が地域社会を変えられるか

- 5-1. 理論としての地域社会のあり方
- 5-2. 地域のつながりの再構築（セーフティネットは再構築できたのか）
- 5-3. 孤独死予備軍を作らないためには

6章：論文のまとめ

- 6-1. 論文の統括
- 6-2. 論文の意義
- 6-3. おわりに

1章：はじめに

1-1. 問題意識

2012年5月21日、九州南部・四国の大部分・紀伊半島から本州の関東付近にかけての地域などで金環日食を見ることができた。日本の大部分で見られるのは129年ぶりということもあり、ワイドショーなどでも連日放送され大きな盛り上がりを見せていた。

我が家でも家族で外に出て金環日食を観察したのだが、そこで起きた普通の光景が私には何とも言えない光景に思え、非常に違和感を覚えたのである。外に出ると多くのご近所さんが同じように観察していたのだが、そこでご近所さんの家族構成を初めて知ったのである。私の家の周りは一軒家住宅の集まりであり普段から周りの家との交流がないのだが、それを差し引いても初めて隣の家族構成を知るのは衝撃的であった。また、多くのご近所さんと目を合わせるのとはなんとなく恥ずかしい感じがしたし、ご近所さんもそのような感じであった。しかし、同時にご近所さんとの妙な一体感や連帯感が生まれたような気がしたのである。この時の違和感が、「地域社会」とはどのようなものなのか私に疑問を持たせたきっかけであった。

この出来事を見て、私は母のある回想を思い出した。東京都の昭島で育った母は、当時の近所付き合いについて以下のように回想している。

『毎日、家族の誰かが最低でも一回は近所の人たちと顔を合わせることがあった。私が学校に行くときなどは、誰かが「いってらっしゃい」と声をかけてくれることも多かった。また、ご近所のお母さんたちが家に集まって談笑したりすることも多かった。よって、二日も顔を見なければ何かあったのではと推測して行動を起こすことなどは当たり前であった。また、旅行などで家を数日離れるときなどは近所の人に家のことを頼んでおくことで安心して家を離れることができた。』

金環日食での出来事と母の言葉から感じたのは、地域社会は以前と大きく変わってしまったということである。もちろん例外はあるが、多くのご近所さんと顔を合わせることが異様だと感じてしまうぐらい、地域のつながりは希薄化してしまっているのだ。そして、そもそも「地域社会とは何か」「地域のつながりとは何か」も分からなくなってしまっているようにも思えた。

そこで本論文では「地域社会の変容」「地域社会の希薄化」というテーマを研究していきたい。しかし、これでは非常に定義が広く焦点もはっきりしなくなってしまう。そこで、「地域社会の変容」「地域社会の希薄化」という現象が社会にどのような影響を与えているのかと考えたときに、真っ先に思い浮かんだのが「孤独死」であった。「孤独死」がどのような問題なのかは後に詳しく触れるが、地域社会の希薄化を象徴する言葉として「孤独死」「無縁社会」という現象が叫ばれているのである。そこで、今回は「孤独死」という問題に焦点を当てて、「孤独死」が起きる地域社会とはどのようなものなのか、「孤

独死」はなぜ起きるのか、「孤独死」を防ぐ方法はあるのか、などを地域社会の希薄化と絡めて調べてみたいと思ったのがそもそもの問題意識である。

1-2. 研究内容、目的

そもそも地域とはどのようなものであろうか。それについて山崎丈夫氏は以下のように述べている。

「地域とは、一定の境界をもって、人びとがそこに住み、生活し、人間関係をおりなおしていく場所である。また、地域では、個別的な私生活没入型の住民のみでは生活関係がなりたないために、そこには人びとによる調整と統合のための集団が形成されていく。(中略)生活の社会化のもとで、お互いの暮らしを支える共同の生活諸条件の整備がすすめられる場所としての地域の意義が強調されよう。」¹

このように、山崎は地域を「人びとが生活をしながら、共同で支えあうような場所」とであると定義している。地域社会・地域コミュニティこそが人びとの支えの土台であり、地方の土台であり、日本社会の土台である。地域コミュニティは、人びとの共同生活の場所として位置づけられ、その中で人びとが支え合い助け合いながら生活をしていくことができる。これこそが、地域社会、地域コミュニティの意義であろう。

では、現在の地域社会はどのような状況なのか。地域社会が「共同で助け合い支えあう場所」でかつてあり、かつそれが理想的な姿だとするならば、現在の地域社会がその期待に応えられているとは残念ながら言えないであろう。なぜなら、「孤独死」というかつてない社会問題が地域社会の中から生じてしまっているからである。しかし、現在の地域社会を「今まで地域社会が担ってきた役割を喪失したもの」と捉えるのはあまりに大雑把でもある。そこで、本論文では「現在の地域社会がどのようなものになっているのか」というテーマをたてたい。しかし、それでは範囲も広く焦点が絞れないので、冒頭の問題意識で取り上げた「孤独死」をメインに地域社会について論じたいと思う。具体的には、「孤独死問題は地域社会のどのような変容が生み出したものか」「地域社会は孤独死問題に対してどのような取り組みを行うべきか」などである。

全体的な構成としては以下のようになっている。

①孤独死についての基礎研究

本論文では、孤独死という社会問題から地域社会の変容や現状を分析していく。そのために、まずは孤独死とは何か、歴史、現状などどのような経緯で孤独死が社会問題としてクローズアップされるようになったかを整理したい。

②孤独死問題から地域社会の変容を分析

地域社会は常に変化しており、戦後65年以上の歴史の中で様々な変容が地域社会で

¹山崎丈夫『地域コミュニティ論：地域分権への協同と構図』pp64

起きていることは自明である。それをすべて整理し地域社会の希薄化を分析するのはあまりに膨大で難しいため、前述のように孤独死というテーマを設定し地域社会の変容を追っていく。

③孤独死と向き合う地域社会

地域社会の変容や希薄化により孤独死は大きな社会問題になってしまった。そして、孤独死という大きな社会問題への対策は遅れており有効な手を打っているとは言えない。そんな中で、孤独死を地域社会の問題と捉えその対策に乗り出している地域社会も数は少ないが存在する。それらの地域社会を調査・取材したい。

④地域社会と孤独死の関係を結論付ける

孤独死を防ぐために地域社会は何ができるのか、どうすべきか。という点や、孤独死をきっかけに地域社会は変われるのかという点についての考察を結論としたい。

ここで、すでに明示されているが今回の研究における仮説・前提をもう一度整理しておきたい。孤独死問題の歴史や現状を考察することで地域社会の変容を明らかにすることを目的としているため、本論文では「孤独死問題が大きくクローズアップされるようになった原因には地域社会の変容がある」という仮説をたてる。後に詳しく述べるが、孤独死自体は昔から存在していて、必ずしも現代特有の問題ではない。しかし、地域社会の変容と共に人々の孤独死に対する考え方、認識も変わってきたのではないのだろうか。例えば、以前は「孤独死が身の回りの例外としての認識であり、自分には関係のないこと」でしかなかったのに対して、現在では「明日は我が身と言った恐怖を多くの人々が持つようになった」という具合である。

2章：孤独死の基礎研究

2-1. 孤独死とは

まず、「孤独死」とは何かについていくつか整理して説明しておきたい。「孤独死」についての明確な定義は定められていない。これは、孤独死と思われる現象が最近急激に問題になってきたことを示唆しているし、行政などが行う孤独死への対応が遅れていることをも意味していると言えるだろう。私たちは突然問題となってクローズアップされるようになったこの孤独死という問題に、ただただ戸惑うばかりである。内閣府の資料では孤独死に関する説明が「誰にも看取られることなく息を引き取り、その後、相当期間放置されるような悲惨な孤立死（孤独死）」²と表現されている。また、松下育夫は「単身生活者であり、亡くなる際に誰にも看取られず、しかも一定期間発見されないで放置されていた死」³と定義している。今や孤独死は単身者だけの問題では亡くなってきているが、「主に単身者が誰にも看取られることなく死亡するケース、特に死後すぐに気付かれないケース」というのがおおかた共通した見解である。本論文でも上記を「孤独死」の定義として進めていきたい。

冒頭から何の躊躇もなく「孤独死」が社会問題であると述べてきたが、ここで二点の疑問を抱く人がいるかもしれない。一つ目が「孤独死は本当に社会問題なのか、孤独死の何が悪いのか」という点。二つ目が「孤独死はいつごろから社会問題として認知されるようになったのか」という点である。この疑問について完全に答えることはできないが、整理してみたい。

一つ目の「孤独死は本当に社会問題なのか、孤独死の何が悪いのか」という疑問に対しては、「死」というものに対する個人の価値観や道徳が深く関係しており、本論文で議論することが難しい。「孤独で死ぬか多くの人に囲まれて死ぬかは個人の自由である」「死んでしまえば孤独だろうが、何だろうが問題ないではないか」といった具合である。これらの議論は本論文の趣旨からはずれてしまうため、「有縁社会から無縁社会へ」という枠組みにおいて説明してみたい。かつての日本は血縁、地域に住む人々の助け合いを重視した地縁、同じ会社で働く人々の間での団結を重視した社縁を生活の基本においた共同体意識を持つ「有縁社会」であった。地域社会の変容は本論文の重要テーマのため、詳しくは後の章で説明していくが、その地域社会が今では「無縁社会」に変わってしまったのである。「有縁社会」では人々のつながりが強くある一方で、そのつながりのために個人の自由は大きく制限され今日という「プライバシー」などというものへの配慮はあまり成されなかったのである。しかし、後に述べる様々な事象が重なっていつしか「有縁社会」から「無縁社会」へと変わっていく。この変容に自由やプライバシーを求める人々の風潮があったことは確かである。つまり、有縁社会では問題になることなどあり

²内閣府の高齢社会白書の平成 22 年度版

³内田康人『変わりゆくコミュニケーション薄れゆくコミュニティ』pp206

えなかった孤独死がクローズアップされていることは、有縁社会に縛られない個人の自由を望んだ人々の要求が叶ったということでもある。そういった面では、孤独死は一概に「社会問題である、悪い」と言えない。しかし、この有縁社会の是正を望んだ人々の終着点が「無縁社会」であったかという点は定かでない。なぜなら、この行き過ぎた地域社会の「無縁化」に対して異議を唱える動き、かつての「有縁社会」を理想として懐かしむ風潮が最近では盛んになってきたからである。その証拠に無縁社会に抵抗し新しい縁を作ろうと模索する人が多くいる。有縁社会を理想として懐かしむ風潮の代表的なものに、映画『Always 三丁目の夕日』がある。昭和三〇年代に、東京に集団就職するためにでてきた主人公を中心に、貧しいながらも人々の絆や結束により奮闘する町の人々の物語である。そこには、家族を中心にいくつもの「縁」に囲まれた人間ドラマが繰り広げられている。この映画が大ヒットしたことからも明らかなように、私たちは「縁」の無い社会を目指したわけではなく「縁」を求めているのである。「有縁社会」では血縁・地縁・社縁など共同体の中で「縁」が決められてしまっていた。それに対し、個人の自由やプライバシーを求めながらも「縁」を自分で選択できるような社会を目指したのである。しかし、現実には「縁」のない「無縁社会」が「有縁社会」にとって変わってしまったのである。その結果、「縁」を求めつつも得ることができず起こってしまったのが「孤独死」である。このような経緯を考えれば「孤独死は本当に社会問題なのか、孤独死の何が悪いのか」という疑問に答えることが出来るのではないか。簡単にまとめると、「私たちは縁のない自由な生活を望んだわけではないのに、無縁に陥り孤独死する可能性を多くの人を持っている。これを考えると、孤独死は社会問題であり決して自由を求めた帰結というように良いことだとプラスに考えることはできない」ということである。また、孤独死が起きてしまった後の現実的な話としては、「孤独死した遺体の腐敗が進み周りの住民へ異臭や虫などの被害が及ぶ」「遺品などの整理を遺族がない場合誰がやるのか」「孤独死が起きたことによる風評被害、家賃の低下」「孤独死を恐れ単身高齢者などへの賃貸拒否」など経済的なものを中心に問題もある。

二つ目の「孤独死はいつごろから社会問題として認知されるようになったのか」という点に関しては、2-2. 孤独死の歴史で述べたいと思う。

「縁」のない「無縁社会」に陥ることにより孤独死が起きてしまう。本論文の題目は「地域社会は孤独死のセーフティネットとして機能できるか」となっているため、言い換えれば「地域社会で孤独死を防ぐような縁を作ることができるか」ということになる。地域社会がどのように変容して「縁」のない社会になってしまったかは3章で詳しく整理し分析するが、現在の地域社会の問題点を首都大学東京准教授の山下祐介氏は以下のように指摘している。

『城下町なら、家が何代にもわたってあり、家業もある。村落でも代々続く家、畑があり墓も近い。ゼロからスタートした郊外の住宅、とくに集合住宅は、家業もない、仏壇

もない、家は住む「ハコ」でしかない。問題はより厄介だ』⁴

この「ハコ」の中で周りと関わりを持たずに生活している人々が、孤独死を引き起こしてしまうのである。「孤独死」が比較的起こりやすい主な状況として、「高齢者」「単身世帯」「定年退職や失業による無職」「賃貸住宅」などが挙げられる。詳しくは後述するが「孤独死」問題自体は最近の事象ではなく古くは明治時代にも報道されている。では、なぜ今日「孤独死」問題が大きくクローズアップされているのか。それこそ、「ハコ」に住む人が急激に増加し、多くの人々が孤独死を「明日は我が身」と考えるほど孤独死が私たちの身近な問題になっているからだろう。では、いつから孤独死は私たちにとって身近な問題、多くの人々が危険性を抱える問題になったのであろうか。孤独死の歴史を次に見ていきたい。

2-2. 孤独死の歴史

まず2-1. で挙げた疑問の二つ目「孤独死はいつごろから社会問題として認知されるようになったのか」について答えたいと思う。孤独死の認知度といったものは統計がなく正確なことは分からないが、最近のように社会問題として大きく取り上げられ、議論されるようになったのにはメディアによる報道が関係していると思われる。

2005年9月にNHKスペシャル『ひとり団地の一室で`中年孤独死`離婚とリストラの果てに』が放送された。本論文でも事例研究として取り上げる千葉県松戸市の常盤平団地における孤独死とそれに立ち向かう住民たちの物語が放映され、大きな反響を呼んだ。なぜなら、それまでは孤独死が「災害の後の仮設住宅で、一人暮らしの高齢者が亡くなるケース」として認知されていたからだ。災害にあった被災者は、そのまま従来の家に住む人、家族や親せきなどのところへ避難する人、仮設住宅に入居する人など様々である。よって、仮設住宅では普段の地域社会で培われたつながりが維持できず、一人になりがちで孤独死が起こりやすいのである。このNHKスペシャルは、こうした非日常的な空間において高齢者が孤独死するという二点の認識に対し、普段の生活において若年層でも孤独死するという現実を知らしめた。この点が反響の大きかった理由である。人々は、普段生活する地域社会において仮設住宅と変わらないレベルの希薄化、人間関係の欠如が生じていること、本来であれば社会の担い手として活躍しているはずの若年までが孤独死していることに、大きなショックを受けたのである。本番組は、視聴者から多くのメッセージが寄せられ、その後も別の番組で取り上げられるなどした。

「40代、50代の中年男性の孤独死が増えていることはショックでした。病気、リストラ、離婚などによって、社会とも家族ともつながりを失ってしまった人々の絶望感を思うと、やりきれない気持ちになります（41歳主婦）」「番組の中で、50代で一度つまずくと立ち直れない現実があると言っていましたが、私もその年代にあり、同様のこ

⁴ 読売新聞2012年5月17日 朝刊

とが我が身に降りかかった場合、どう対処すればよいか考えるだけで、暗澹とした気持ちになりました(55歳会社員)⁵などのメッセージが寄せられた。本番組は、第26回『『地方の時代』映像祭』のグランプリを受賞することになる。

また、2010年1月のNHKスペシャル『無縁社会―“無縁死”3万2千人の衝撃』も大きな反響を呼んだ。おそらく近年の「孤独死の社会問題化」「人々が孤独死を社会問題であると認識した」のは、この番組がきっかけであろう。視聴者からのNHKホームページへの書き込みは1500件を超え、ネット上で話題になるなど「無縁社会」「孤独死」というキーワードが瞬く間に広まって流行語のようになった。今でこそ普通に使われている「無縁社会」という言葉も、「人間関係が希薄になり、隣人の死さえ容易に発見されない社会」を表すためこのNHKスペシャル取材班が創った造語であるが、取り上げられると大きな反響を呼び「無縁社会」という言葉が広く知られるようになった。今日当たり前のように使われているこの造語の広まりを見ても、いかに多くの人々が「孤独死」「無縁社会」の問題に注目しているかが分かる。過去にも孤独死について取り上げた番組は存在する。そんな中で、本番組が大きな反響を呼び流行語を生み出した背景としては、やはり「孤独死」という現象を誰もがその可能性を抱える社会になってしまったことが大きい。高齢者に止まらず若年層や若い世代にも単身者は多く、未婚率は上昇する一方である。また、今は会社に属して働いており家族もいるが、退職し子どもが独立し配偶者が亡くなれば、自分にはどのような「縁」が残っているのだろうかと考える人も多いはずだ。「私は孤独死など絶対にすることは無い」と自信を持って言える人が社会においてかなりの少数派になってしまっており、そう自信を持って言えるほどの「縁」を多くの人が見つけられていないのである。このように、「孤独死」は誰もが自分の身に迫ってくる問題だと現在では捉えられているのである。

では、そもそも「孤独死」「無縁社会」という社会現象はいつごろから問題となっているのであろうか。先ほど古くは明治時代から「孤独死」が報道されていると述べたが、近年の問題だと認識している人が多いのではないだろうか。そこで、二つの記事を紹介したいと思う。両記事とも個人情報保護のため一部記号化している。

『15日夜、東京荒川のアパートで独身青年の病死が、たずねてきた同僚によって1週間ぶりにわかった。死んでいたのは、荒川区〇〇の会社員〇〇さん(20)で荒川署の調べによると、〇〇さんは9日から会社を休んでおり、階下の共同新聞受けに9日付朝刊からの新聞がたまっていた。同じアパートに住んでいる人たちとの付き合いがなく、新聞がたまっても出張ではないかと誰も気にとめなかったという。〇〇さんは昨年秋、〇〇をわずらい千葉県柏市の会社へ勤めながら通院していた。月2、3日休むため会社でも「また休んでいる」としか思っていなかった。ところがあまりに長く休むので

⁵ NHKスペシャル・佐々木とく子『ひとり誰にも看取られず』pp15

同僚が15日夜に訪ねてみると、居間のフトンの中で死んでいた。』⁶

『19日午前9時半ごろ、東京都杉並区〇〇会社員〇〇さん（59）が死んでいるのを近所の人が見つけ、高井戸署に届けた。同署の調べでは、死後約1カ月。〇〇さんは酒好きで肝臓が悪く、病院通いをしていたことなどから病死とみられる。31年に離婚したあと一人暮らしで、先日14日から病気を理由に会社を休んでいた。19日朝、管理人の〇〇さんらが〇〇さんが共益費を滞納しているのを気にして隣の部屋からベランダにはいり、ガラス戸越しに見つけた』⁷

このように最近の現象だと思われている「孤独死」が、今から40年以上前にも起きていたのである。記事の中で「誰も気にとめなかった」とあるようにこのころから「人間関係の希薄化」「近所づきあいの減少」が進んでいることが分かる。しかし、当時と現在では「孤独死」の報道に対する人々の反応が違っていることは注目に値する。当時は都心部において「孤独死」が起きることに純粋な驚きを持つ意見が多かったのである。すなわち、都心部は多くの人が暮らしているのにどうして誰にも看取られないという状況が起きてしまうのであろうという驚きである。人が多いところで孤独という、逆説的な意味において「孤独死」は注目されていた。このことから、当時、多くの方は共同体として心配りをある意味当然の行いとして認識していたことがうかがえる。その共同体意識が地域社会において作られ、「周囲に人が多くいれば孤独にはならない」というロジックを成り立たせていたのである。

では、現在はどうかであろう。私たちは「孤独死」という現象自体に驚きを持っているのであって、決して人の多い都心部で孤独死が発生することに驚きを持っているのではない。むしろ、都心部で近所づきあいもなく孤独であることは普通のことであり、郊外より都心の方が「孤独死」が起きやすいとさえ考える人もいるだろう。このことから、私たちが近所などとの共同体意識を失いかけている、または失っていることがわかる。この1970年代と現在の「孤独死」に対する考え方は、地域社会の変容によって変化していったものであるし、今後の地域社会の在り方を考える上でも非常に重要な論点であると思う。

参考までに1987年に東京都監察医務院によって調べられた「孤独死」の調査に関する記事をおきたい。「孤独死」について調べた資料としては最も古いものだと言われている。なお、東京都監察医務院は「昭和23年3月に開院して以来、死体解剖保存法第8条に基づいて東京都23区内で発生したすべての不自然死（死因不明の急性死や事故死など）について、死体の検案及び解剖を行いその死因を明らかにする仕事」⁸をして

⁶ 1970年4月16日 朝日新聞夕刊

⁷ 1970年4月20日 朝日新聞朝刊

⁸ 東京都福祉保健局 東京都監察医務院ホームページ

いる東京都福祉保健局の機関である。

『マンモス都市・東京の片隅でだれにも看とられないまま病気などで息を引き取る、一人暮らしの「孤独死」がふえ、昨年だけで約千人にもものぼっていることが東京都監察医務院の調査でわかった。とりわけ、60歳以上の高齢者の増加ぶりが目立つ。一方、孤独死全体の半数近くは発見されるまで1日以上たっており、中には6カ月も経過していた例すらあった。孤独死がこれほどまとまった形で調査されたのは初めてといい、調査スタッフの中心となった同院の徳留省悟監察医長（37）が12日、都庁内で開かれる東京都衛生局学会で発表する。調査方法は昨年一年間に都監察医務院で取り扱った変死体6657例の検体調査と解剖報告書をもとに、独居者分を抜き出して分析した。同時に55年分も調べた。

それによると独居死は1084人で、55年と比べ21%ふえた。大半が無職で、アパート住まい。年代別にみると、60歳以上が464人と目立ち、全体の4割強を占めた。3年前と比較すると一挙に158人、52%もふえている。死因をみると、自殺214人を別にすれば、心筋こうそくや冠状動脈硬化症などの「虚血性心疾患」279人と、脳出血や脳こうそくなどの「脳血管疾患」228人が中心。

死亡推定時刻から発見されるまでの経過時間をみると、全体の46%にあたる496人は死後1日以上たっていた。うち、1週間以上に限ると134人。1か月以上に絞っても、26人であった。最も時間がたっていたのは6カ月で、板橋区の学生Aさん（20）と葛飾区の無職Bさん（42）の2例（いずれも男性）であった。Aさんの場合、アパート住まいで、管理人が集金に来るまで誰も気付かなかった。遺体はミイラ化していた。悲惨な例も少なくない。江東区のアパートに住んでいた65歳の男性が2カ月後に発見されたきっかけは、通行人が部屋の窓にたかっていたハエに気付いたためだった。また、入浴中の死亡、そのままの姿で発見まで13日間も経過した独居老人の例もある。

発見者は①隣人253件②知人243件③管理人212件④親類209件の順。民生委員ら福祉関係者の発見は42件どまりだった。徳留監察医長は「悪臭がしていても気にもとめないなど周囲が無関心なケースが少なくない高齢化社会への移行が進む中で、孤独死は今後も増え続けるだろう。連絡や交流を密にするなど、病弱の独身者対策が必要だ」と指摘している。』⁹

この東京都監察医務院の調査記事を長々と載せたのは、これを読むことで現在の「孤独死」が当時よりとても深刻化していることが分かるからである。まず1986年の孤独死が1084人ということでもっとも多く感じるが、自殺が214人いる。また、46%にあたる496人が死後1日以上たっていたとあるが、裏を返せば54%にあたる588人はその日のうちに見つかったことになる。前にも述べたように「孤独死」には明確な定義がなくいたしかたないことだが、現在の「孤独死」には自殺者やその日のうちに見つかった人々はカウントされないであろう。そう考えると、現在の「孤独死」に該当

⁹ 1987年11月11日 朝日新聞朝刊

する人々は大分少なくなりだいたい3分の1ぐらいまで減るのではないか。また、発見者の1位が隣人なことにも着目したい。半数以上がその日のうちに発見されたことを考えると、隣人が発見することができた理由は異臭や溜まった郵便物などの外的な要因でないことは予想できる。だとすれば、近所づきあいなど何かしらのつながりが存在し、地域社会がセーフティネットとして機能していたことになる。確かに本文には悲惨なケースも紹介されているが、この時代には多くの人が地域社会というセーフティネットに守られていたことがわかる。だからこそ、このような記事が出ても多くの人が身近に感じることなく、大きな話題にもならなかったのであろう。また、最も時間がたったのが6カ月というのも現在に比べると短い。後にも紹介するが、3年後に白骨遺体として発見されるというケースなど、年単位の発見はざらにあることである。

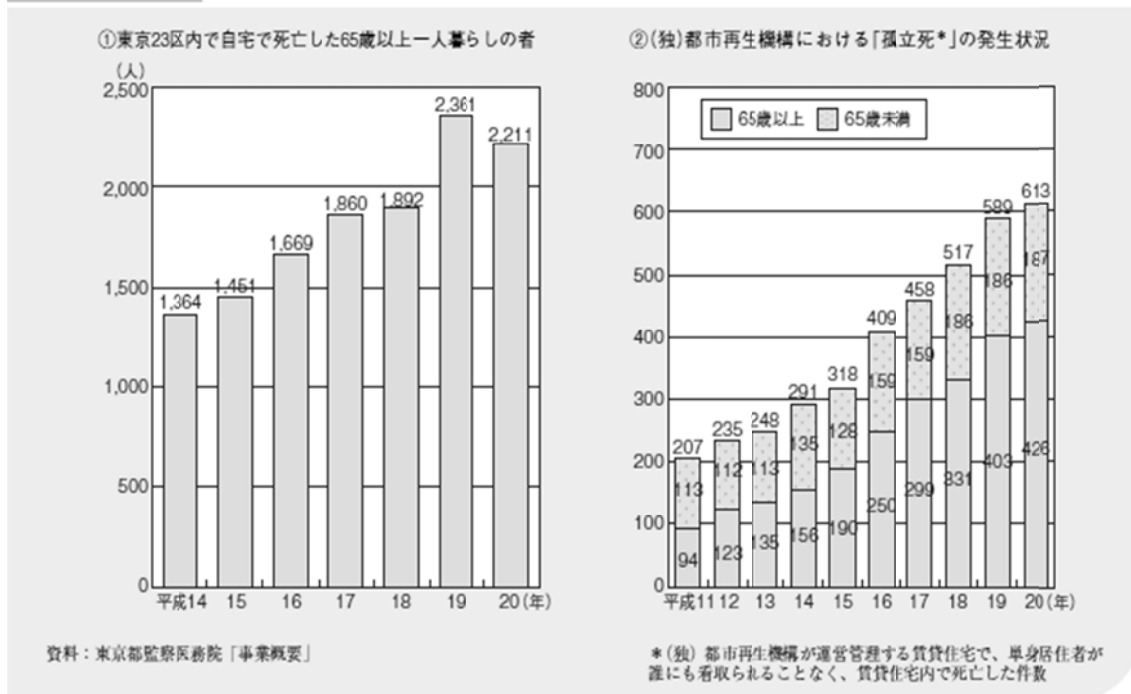
これまで「孤独死」が40年以上前から報道されてきた歴史を整理してきた。では、どのあたりから人々は「孤独死」について大きな関心を抱くようになったのであろうか。その契機となったのが、前にも少し触れたが阪神淡路大震災後に作られた仮設住宅で起きた孤独死である。この阪神淡路大震災後の「震災孤独死」は1年7カ月あまりで100人に達し、大きな社会問題となった。具体的な事例としては、震災により妻を亡くした無職の男性が仮設住宅移住以来、近所との交流がなくなり孤独死するというような事例が相次いだ。このケースは普段の地域社会において人々のつながりや「縁」を作りセーフティネットをしいてきた被災者が、仮設住宅への入居を機に地域社会が崩壊しその「つながり」や「縁」を失うことによる孤独死である。よって、孤独死が日常生活に潜むものだという認識はこの時点で生じていない。この出来事を機に「孤独死」問題は広く周知され、仮設住宅における見守りの強化など対策が取られ始めることとなる。また、仮設住宅による孤独死を検証する中でその原因としていくつかのものが挙げられた。上記で述べたような地域社会の崩壊による「近所づきあいの減少」以外にも、「劣悪な住環境」「低所得」「慢性疾患」「アルコール依存」などの原因が明らかになった。これらの原因は何も仮設住宅に限られた話ではない。「劣悪な住環境」「低所得」などは高齢者の多く住む団地などにも多くあてはまる事例であり、団地での孤独死なども注目され始めていくのである。

2-3. 孤独死の現状

では、「孤独死」はどれくらい起きているのであろうか。2-1. 2-2. で紹介したように孤独死が大きな社会問題として広く認められているのにも関わらず、それについてしっかり調査した統計はない。孤独死の定義があいまいであることや、家族や親せきなど遺族がおらず孤独死するケースもあるため、調査すること自体が困難になっているのである。以下にいくつかのグラフを提示したい。東京都監察医務院が公表している孤

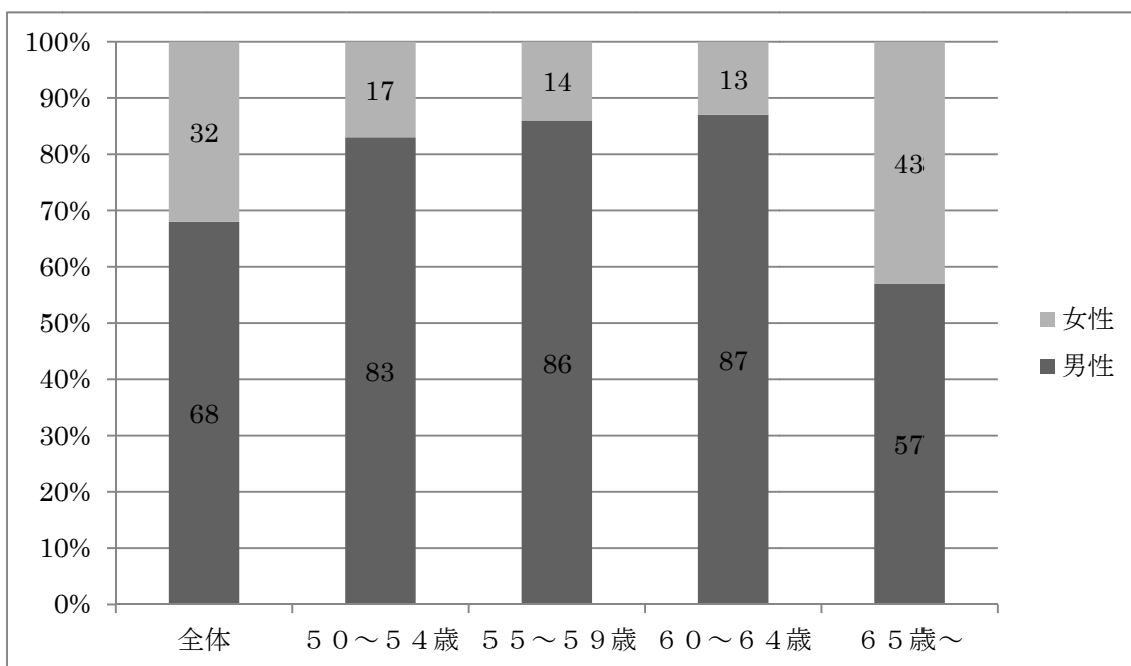
独死の発生状況に関する資料や、統計図表より筆者が作成したグラフである。

図1-3-9 孤立死の発生状況



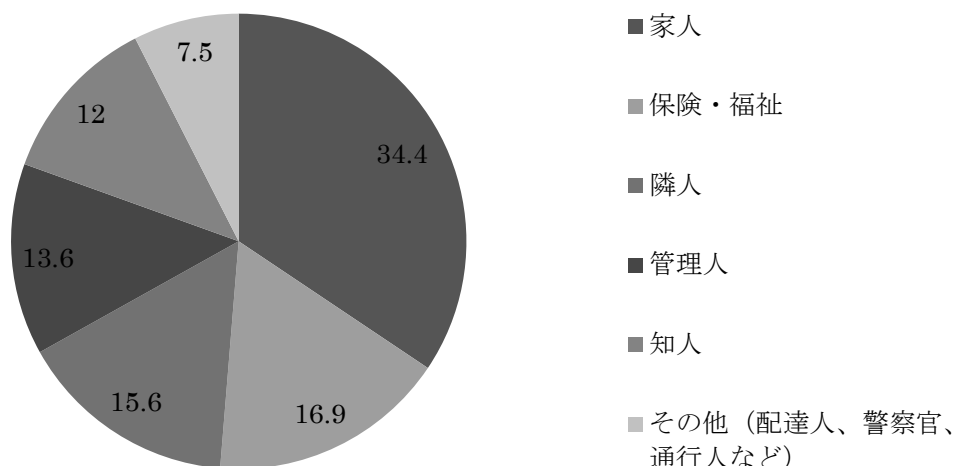
※東京都監察医務院「事業概要」

ひとり暮らしの者の死者数年代別内訳



※東京都監察医務院平成21年版統計表より作成

65歳以上の一人暮らしの自宅で死亡した ときの発見者



※東京都監察医務院平成23年版事業概要より作成

まず、一番目の表から見ると、孤独死は年々増加しているのが分かる。都市再生機構での孤独死は平成11年から平成20年のわずか9年で約3倍にまで増えているのが分かる。この増加に比例してか、「孤独死」に関する報道は増え世間の注目され、広がりを見せている。東京都都市整備局によると都営住宅で孤独死するケースは年間約400件を超えるという。先ほどあげたような「劣悪な住環境」「低所得」「慢性疾患」「アルコール依存」などの「孤独死」が発生しやすい要件を多く備え、近所づきあいも極端に少ない「都営住宅」「UR住宅」などの賃貸住宅は、最も先鋭的に「孤独死」が現れる場所と言えるだろう。

また、多くは高齢者（65歳以上）と思われていた「孤独死」も最近は様々なケースが増え複雑さを増している。例えば上記のグラフにおいても、平成20年の65歳以上の孤独死は613件中426件となっている。裏を返せば約200件は65歳以下となっており、「孤独死」の多様化が進んでいる。対策としての見守りも、65歳以上の高齢者を主にしているため40代、50代が見過ごされているという指摘もある。また、最近では95歳と63歳の母娘が孤立死、シングルマザーとその子供の孤独死など問題は単身ということに限られなくなっている。これが対策を難しくしている要因の一つでもある。

孤独死が起きる性別では、女性より男性が多いことも注目すべき点である。これは、男性が女性より地域社会に「縁」を持つことができていない証拠である。サラリーマン

として働き現役時代に地域社会とあまり関わりを持たなかった男性は、退職し社縁を失うと孤立してしまうのである。「慢性疾患」「アルコール依存」が比較的男性に多いことも関係しているであろう。3番目のグラフでは孤独死の発見者をまとめている。注目すべきは、2-2.で紹介した1987年の東京都監察医務院の報告との比較である。約30年前は発見者が「隣人」が一番多く、二番目が「知人」であった。それに対して、現在では「家人」が一番多く、二番目が「保険・福祉」であり、「隣人」は三番目、「知人」は四番目であった。単純に比較することはできないが、30年前には維持されていた地域社会というセーフティネットが崩壊していき、地域社会に「縁」を持つ人が減少したと言えるであろう。

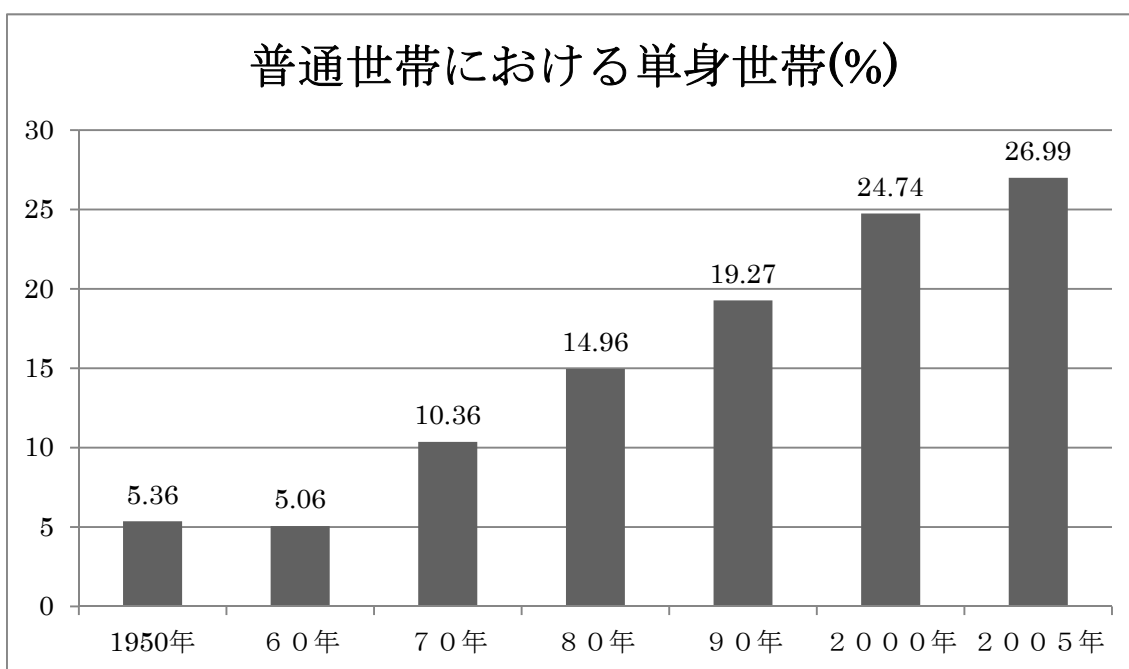
では、どのようにして人々は地域社会という「セーフティネット」「縁」を失っていったのであろうか。地域社会の変容を追ってみたい。

3章：孤独死問題から見た地域社会の変容

2章でも触れたが、日本は従来、血縁、地域に住む人々の助け合いを重視した地縁、同じ会社で働く人々の間での団結を重視した社縁を生活の基本においた共同体意識を持つ「有縁社会」であった。有縁社会ではいくつものセーフティネットがあり、それによって人々はつながりを持つことができた。しかし、2章でも述べたように「有縁社会」は「無縁社会」へと変わり、地域社会は「セーフティネット」「縁」として機能しなくなってきた。その結果としての社会問題が「孤独死」であった。では、どのような社会の変容により私たちはいつの間にか「無縁社会」に生活するようになったのであろうか。そして、孤独死が問題になるようになったのであろうか。

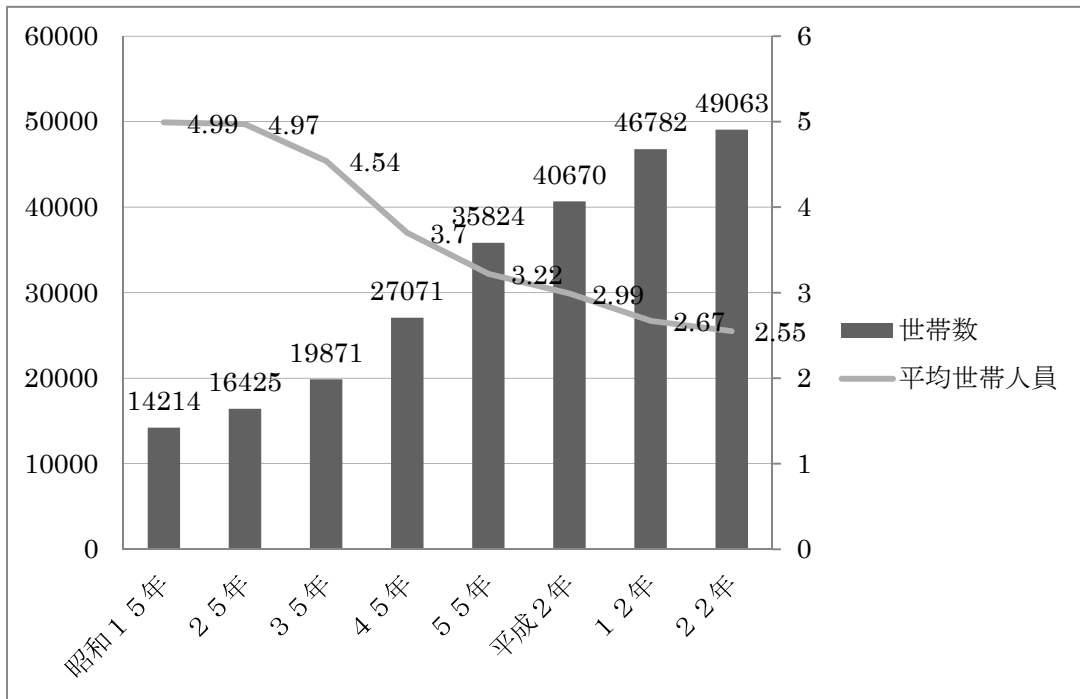
3-1. 単身世帯の増加

地域社会という「セーフティネット」「縁」を失うことにより社会的に孤立し孤独死すると今まで述べてきたが、そもそも家族など同居していれば孤独死する可能性は非常に低い。よって、孤独死を引き起こす地域社会の変容としてまず考えられるのが単身世帯の増加である。孤独死は、高齢者だけでなく若年層にも広がり、単身世帯だけでなく同居世帯にも広がっている。しかし、やはり孤独死の多くは高齢者の単身世帯である。



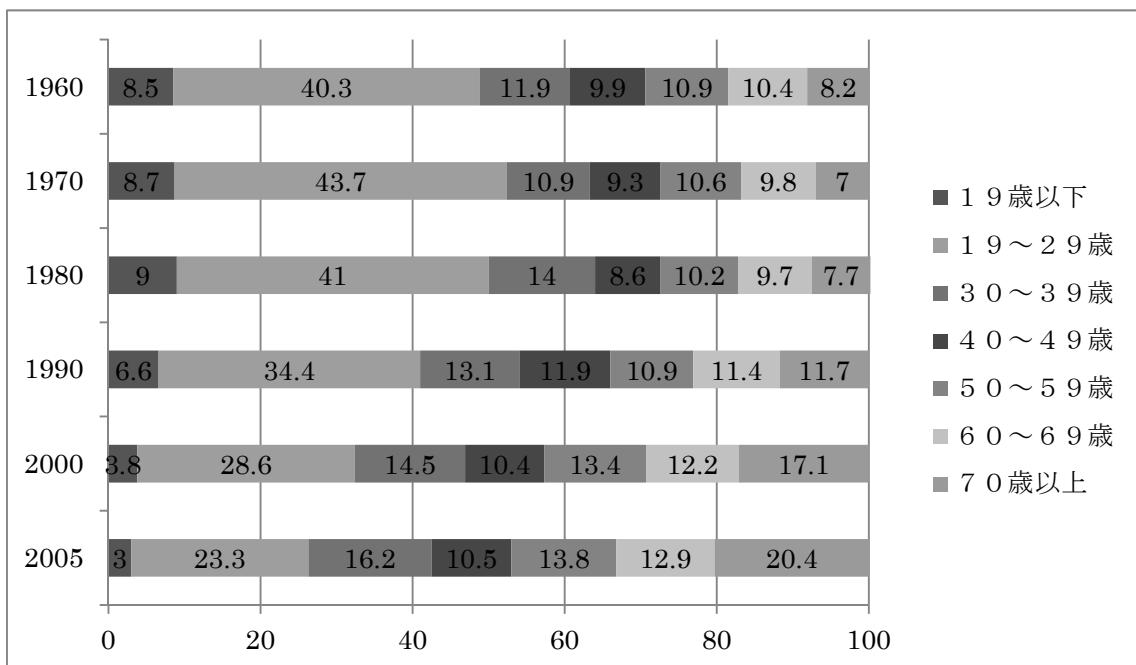
※総務省統計局『国勢調査報告』の統計を基に作成

世帯数と平均世帯人員の推移



※総務省統計局『国勢調査報告』¹⁰

単独世帯の世帯主年齢別構成割合の年次推移 (%)



※総務省統計局『国勢調査報告』¹¹

¹⁰ 三浦文夫『図説高齢者白書2006年度版』pp51

¹¹ 中沢卓美・淑徳大学孤独死研究会『団地と孤独死』pp95

以上の三つのグラフは世帯数、単身世帯、平均世帯人員、単身世帯の世帯主についてまとめたものである。まずは、単身世帯の推移から見ていきたい。単身世帯は1950年代から60年代までは横ばいに推移してきたが、その後1960年代からは単身世帯は急激に増加している。2005年の単身世帯は26.99%まで上昇している。国立社会保障・人口問題研究所によると2030年には単身世帯は37.4%になるという推計がでていいる。このように単身世帯が増加している中で、その単身世帯を構成する世帯主はどう推移しているのだろうか。一言でまとめてしまうと、単身世帯において高齢化が進んでいる。1960年に40.3%もいた20～29歳は2005年に23.3%に減り、同じく60年に8.2%だった70歳以上は2005年に20.4%まで増えている。単身世帯の増加とともに単身世帯における高齢者の内訳も増えていったのである。

では、なぜ単身世帯がこれほどまでに増加したのであろうか。その要因としてまず挙げられるのが、世帯規模の変化である。世帯規模は高度経済成長期の始まりである1960年代から縮小しはじめ、一世帯あたりは1950年に4.97人に対して2005年には2.55人になっている。これは単純に考えて夫婦と子ども3人で生活していた世帯が夫婦のみの生活になった、ということである。1960年代以降に単身世帯が増加した主な理由として挙げられるのが、産業構造の転換である。かつて主要産業が第一産業であった農業社会においては、親と子供は同居し場合によっては3世帯で三世代同居多人数家族を作り農林水産業に従事していた。しかし、それが第二次産業（工業）、第三次産業（小売業、サービス業）などへと産業構造の転換が起き、都市の労働力需要が急増し、多くの若年労働者が農村部から都市部へと流入することとなった。2章で取り上げた映画『Always 三丁目の夕日』における東京への集団就職がこの代表例である。そして、そのときに流入した彼らの受け皿となったのが今では「孤独死」が多く発生している公団や団地であった。

当時は高度経済成長期にあたり、所得水準の増加や豊かな都市への憧れが広がったことで若年層の向都離村現象に拍車をかけることとなる。上記のグラフにおける1970年の単身世帯の43.7%が20～29歳であることはこのような事象を如実に表している。都市に流入した彼らは都市部に定着し、結婚して新しい世帯を都市部で持つこととなった。都市部に若者が流入し定着したことにより、親との同居は激減し親の世代が単身世帯となっていったのである。

また、家族形態の変化も世帯構造の変化、単身世帯の増加に関係している。以前のような農業社会においては三世代同居多人数家族が形成されていたが、都市に出てサラリーマン、雇用者としての働き方が大多数となり、一定の給料に見合った小家族が形成される。給料が一定のため、それに見合った育児費、教育費の範囲でしか子どもが産めないためである。また、農業社会では夫婦が親と同居して親の所有する農業を手伝い、やがては夫婦が後を継ぐというモデルが出来あがっていたが、都市においては親子が同居

することの必要性は低く別居が一般的になった。子どもと同居する高齢者の割合は、1980年代の70%から200年代には50%以下まで低下しており、今後もその傾向に歯止めがかからないとされている。

3-2. 村落的生活様式から都市的生活様式の転換

農業社会から都市へと暮らす場所を変えた人々は、その生活様式をも大きく変えることとなる。それが、村落的生活様式から都市的生活様式への転換である。これについては、倉沢進のまとめを引用したい。

『かつて農業を中心とした社会には『村落的生活様式』が広くみられた。村落的生活様式の第一の特長は、家族（個人）における自給自足性が高いこと（みずから耕してみずから食う）が求められる。ただし村落においても家族（個人）の力だけでは処理できない共通、共同の問題（治水、治山、道普請、冠婚葬祭、屋根の葺きかえ等々）が存在し、そうした事柄の処理には、非専門家＝素人である住民同士の相互扶助による共同処理で解決されてきた。したがって、そこでは地縁にもとづいた結びつきの強い共同体が形成されていた。

他方、都市型生活様式は家族（個人）の自給自足性は、極めて低く、さらに家族（個人）だけでは処理できない問題は、素人の住民の相互扶助での処理解決ではなく、高度に分業化された専門機関（専門家）の提供する物財やサービスに依存して、専門的処理により解決を計ることに特徴がある。いずれにせよ、現代の都市生活は、専門機関（専門家）すなわち、「行政」や「企業」によって提供される多種多様な物財やサービスを前提に成り立っているのである。』¹²

少し具体的に村落的生活様式から都市的生活様式への転換を分析してみたい。村落的生活様式における事例に農業社会における稲作が考えられる。稲作において水田はそれぞれ個人のものであるが、水田はそれぞれ独立しておらず隣の水田とつながっていたり、水路を共有していたりする。よって、稲作を行う以上、水の管理と言う個人では処理できない共通の問題が発生するのである。この共通の問題は米を作り生活していく彼らにとっては大きな問題であるために、彼らは共同体としての意識を持ち非常に強い「縁」が作られるのである。そのような「縁」の中で育ち、農業の後継者となって家を継ぐことにより何代にも渡る強固な「縁」が農業社会という地域社会では作られていったのである。そのような村落的生活様式が都市的生活様式に変わると、生活していくために当然必要なものであった地域共同体の枠組みが亡くなっていく。地域社会のつながりから個人を解放し、個人のプライバシーや私的自由が確立されたのである。都市的生活様式においても個人で解決できない問題は存在するが、それらは専門家に対して対価を払うことで解消されることになる。現在では、「何でも屋さん」と呼ばれる個人で解決でき

¹² 高橋勇悦編『テキストブック社会学（5）地域社会』pp28~29

ない問題を専門に扱う企業まで存在する。孤独死の「見守りサービス」などもこれに該当するであろう。メーカー、セキュリティ、不動産、ガスなど多様な事業者がハード面での「孤独死」対策に参入している。「見守り」という事象も、村落的生活様式では地域社会が分担して担当することであるが、都市的生活様式では専門家がサービスとして提供しているのである。逆に、現在のような都市的生活様式においては地域社会で「見守り」を行うということが難しくなってしまった。これが、孤独死が社会問題となっている原因の一つでもあるだろう。

このように都市的生活様式において血縁、地縁、社縁などに拘束されない社会が到来し人々の自由の範囲は確実に広がった。そして、当時は環境に強制された「有縁社会」ではなく、各自が主体的に縁を選びそれが多様に展開される「有縁社会」の実現が期待されたのである。これを上野千鶴子は、『社会関係においても、従来の血縁、地縁、会社縁とは異なった各自のライフスタイルに合致した「選べない」「避けられない」「降りられない」縁とは違った、原則、加入、脱退が自由で拘束性がなく、開放的な選びあう選択縁が都市居住者に一般化する』¹³と予想していた。しかし、現実には「縁」を選択し形成することができず「無縁社会」が到来してしまうこととなる。

3-3. コミュニティの変化、近所づきあいの減少

では、どうして各自が主体的に「縁」を構成することができる「有縁社会」が誕生せず「無縁社会」が生まれてしまったのであろうか。それは、従来の地域社会とは違うコミュニティの変化や近所づきあいの減少があげられる。

まず挙げられるのが、コミュニティの変化である。従来の村落的生活様式や有縁社会において地域社会のコミュニティが強い共同体意識によって結ばれていたことは前述した。それは、個人で解決できない問題をそのコミュニティで共有し解決するという、相互扶助の形が成り立っていたからである。「選べない」「避けられない」「降りられない」というようにネガティブな印象を持たれがちな、コミュニティの「縁」ではあったが生活していくために当然必要なものとして大きな影響力・結束力を持ったのである。しかし、村落的生活様式から都市的生活様式への転換の中で、コミュニティの拘束力は弱まっていくことになる。都市的生活様式では、個人で解決できない問題を専門家が提供する物財やサービスによって解決するため、それぞれの家が独立して生活することができてしまう。村落的生活様式における水田のようにそれぞれが独立しつつも他と何らかの関わりを持っていることで形成されていたコミュニティは、弱まっていくこととなる。ここで私の母の実家の周辺で作られたコミュニティの話を紹介したい。母の実家は一軒家で道路に面していたが、その家の裏には道路に面してない家がいくつも存在した。よって、母の実家の庭の一部に道を作り、その道をいくつかの裏の家とで共有するということが行われていた。そこには庭の共有というコミュニティが作られており、裏の家

¹³ 栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』 pp226~243

にとっては生活していく上でそれは欠かせないコミュニティであった。いくつかの裏の家がそのコミュニティを「選べない」「避けられない」というようにネガティブに考えていたかは定かでないが、生活のための必要性からコミュニティは維持されていた。そして、その道の清掃や維持などの共同管理から始まり、昼時は誰かの家でお茶をする、誰かが具合が悪くなれば家事を代行する、食事を作って持っていくなど、とても仲の良いコミュニティが維持されていたのである。冒頭に紹介した母の回想『毎日、家族の誰かが最低でも一回は近所の人たちと顔を合わせることがあった。私が学校に行くときなどは、誰かが「いってらっしゃい」と声をかけてくれることも多かった。また、ご近所のお母さんたちが家に集まって談笑したりすることも多かった。よって、二日も顔を見なければ何かあったのではと推測して行動を起こすことなどは当たり前であった。また、旅行などで家を数日離れるときなどは近所の人に家のことを頼んでおくことで安心して家を離れることができた。』は、このようなコミュニティの中で育ったからこそ感じられたことでもあった。このように生活に密着したコミュニティこそが地域社会を支えていたのであるが、生活に密着したコミュニティを都市的生活様式で維持するのは非常に困難であった。なぜなら、各自が主体的に選択する「コミュニティ」「縁」はその性質上、拘束力がなく、生活に密着しない言うなれば趣味のような範囲でのコミュニティが必然化するからである。実際に、母の実家も建て替えや区画整理などにより公的に道が整備され、庭の一部を共同で管理する必要はなくなっていった。また、家事代行サービス、食事の宅配サービス、警備・セキュリティのサービスなど都市的生活様式の中で専門家によって様々なサービスが提供される中で、個人で独立して生活していくことが可能になった。幸い母の実家では、お昼時にお茶をするなどの周りの家との交流が続いたが、それは生活に密着していないため必要性が低く、拘束力の弱い趣味レベルのコミュニティに変化してしまったのである。

次に挙げられるのが同質性の崩壊である。高度経済成長期における産業構造の転換、都市の労働力需要の拡大、豊かな都市へのあこがれなどから、特に若年層を中心に向都離村現象が起きたことはすでに述べた。都市部に流入した若年層が、今まで農村部で築いたようなコミュニティをまったく作らず「無縁」になったかというところではない。都市部に流入した彼らはやがて家族を持ち、その受け皿になった団地では当初ある程度交流があり、団地と言う地域社会でコミュニティを形成していたのである。団地と言うと、主婦があちこちで立ち話をしている、その横では子供たちが走り回っているという情景を思い浮かべる人もいるかもしれない。今でこそ「孤独死」の舞台としてクローズアップされる団地であるが、都市部に流入した若年層が家族を形成した時代にはそのような光景が当たり前であった。そこでは、村落的生活様式ほどの強固なコミュニティではなかったが、子供を持つ親同士が遊び、悩みの相談などで交流する、サークル活動なども行われていたのである。それらのコミュニティが形成されたポイントは、彼らが同質的な集まりであったということである。村落的生活様式において、稲作という同質性に

おける地域社会でコミュニティが形成されたことを説明したが、同質性というのはコミュニティを形成する上で非常に重要な要素である。なぜなら、同質性のある集団であってこそ個人で解決できない問題が共通・共同の問題になるからである。個人で解決できない問題が各自でばらばらであれば、それがコミュニティを形成し地域社会をまとめていく推進力には成りえない。当初の団地では個人では解決できない共通の問題というレベルのものは多くなかったが、少なくとも同質性をもたらす共通の話題によってコミュニティが形成されていたのである。しかし、その後団地が老朽化すると同時に、所得水準の増加などにより良いランクの高い分譲マンションが登場し、若年層が家族と共に住むという団地は同質性を失っていく。団地の価格は下落し、団地に残る家族がいる一方で単身者や低所得層が流入してくることになる。そして、年齢や家族構成が様々になると、共通の課題だけでなく共通の話題すら欠如するという状態になる。コミュニティは喪失され、近所づきあいも無くなっていくこととなる。

最後に挙げられるのが、単身世帯男性の孤立である。2-3. 孤独死の現状で示した単身者の孤独死のグラフにおいて、その性別は女性より男性が圧倒的に多いことが分かった。60～64歳においては実に87%の孤独死が男性である。従来の「有縁社会」においては男性が地域社会を支える担い手であった。それは、村落的生活様式において地域社会で仕事をするのがコミュニティの形成にも関わっていたからである。しかし、サラリーマンとして人生の大半を過ごしてきた男性は、地域社会に人間関係を形成できていない。地域社会でのお祭りや行事なども参加するのは自営業などその地域社会に根差した男性であることが多い。しかし、例えば商店街などの地域社会に根差した商売をする人は年々すくなくなり、その多くがサラリーマンとして働き地域社会との接点を失ってしまうのである。そして、退職後には地域社会で孤立してしまうという状況がこちらで起きている。男性の場合は女性ほど地域社会に積極的に参加することが少なく、退職後に新たな「縁」を作ることに躊躇する人が多い。世田谷区において退職後の男性を中心に作られた料理サークルである「男の台所」でも、退職して家に引きこもる男性をいかに外に連れ出すかがメンバーの頭を悩ませる問題であった。「男の台所」では、区内のイベントに多数出展して参加を呼び掛け、初めての人が顔を出しやすいような環境作りを行い、順調にメンバーを増やしてきた。しかし、このような取り組みを行うコミュニティがまだまだ少ない。

3-4. 格差問題

孤独死問題から見た地域社会の変容を考察していく上で、格差の問題は避けて通ることはできない。格差の問題は政治的、経済的な側面など非常に幅広いのであまり深くは取り上げないが最低限説明しておきたい。

3-3. において同質性の崩壊によって地域社会のコミュニティが崩壊し、近所づきあいが減ったことはすでに述べた。その同質性の崩壊の原因は世帯構成の変化だけでは

く格差の問題の影響も大きいのである。都市的生活様式においても専門家では解決できない課題があるが、その生活課題が同質でなければ地域社会は機能しない。高度経済成長期において日本社会は人口の8割が中流とされた同質社会であった。よって個々の違いはあれ、中流という点で同質性が存在していた。しかし、1990年代初めのバブル崩壊から「失われた20年」と呼ばれるように、格差は拡大し格差社会に突入することとなる。都市的生活様式において専門家が解決できない問題が生じたとしても、富裕層の抱える問題と貧困層の抱える問題は大きく異なり、その問題を機に両者が地域社会でコミュニティを形成することには至らないのである。

ここで一つの疑問が生じるのではないか。現在の団地には単身の高齢者が多くある意味で同質性があるとも言えるが、なぜコミュニティが形成されたり交流が生まれなかったのだろうか。残念ながらこれに関する意識調査などがなく正確なことは分からないが、格差の問題がその原因の一つである可能性は十分にあるのではないか。現在、団地に住んでいる単身者は比較的所得層であることが多く、当然生活に余裕がない。生活に余裕がなく地域社会に目を向けられない場合や、低所得であることに対する負い目から積極的に地域社会に関与できない場合があるのではないだろうか。都市的生活様式において、個人が解決できない課題は専門家によって解決されるが、それにはもちろん対価が必要である。単身の低所得者などは、個人で解決できない課題があるにもかかわらず専門家にも頼めず、頼るコミュニティもないという状況が生じているのだ。長期的な格差の是正はもちろんであるが、短期的に彼らをどう支援できるかも孤独死対策のポイントの一つであろう。具体的な対策などについては、後の章で事例研究とあわせて論じたいと思う。

4章：地域社会の孤独死対策（松戸市常盤平団地の事例研究）

今まで孤独死について、また孤独死を引き起こす地域社会の変容について見てきた。そこでは、地域社会が変容し「有縁社会」から「無縁社会」へとなる中で、多くの孤独死が発生している。孤独死は住宅街であっても集合住宅であってもどこでも起きる問題であるが、孤独死の性質上、よりそれが先鋭化されて現れるのが団地や古い集合住宅であることはすでに述べた。団地はそもそも村落的生活様式が都市的生活様式へと変わっていく中で受け皿として作られたものであり、同質性の崩壊にもいち早く直面した場所でもある。また、高齢者を中心とした単身者が多く住んでおり、孤独死の危険性が非常に高い。このように孤独死や地域社会の変容が先鋭的に表われる団地であるが、実際の団地はどのような現状なのであろうか。前述した NHK スペシャルにも登場し、いち早く孤独という問題に団地全体で立ち向かっている千葉県松戸市の常盤平団地について事例研究を行いたいと思う。

4-1. 常盤平団地とは

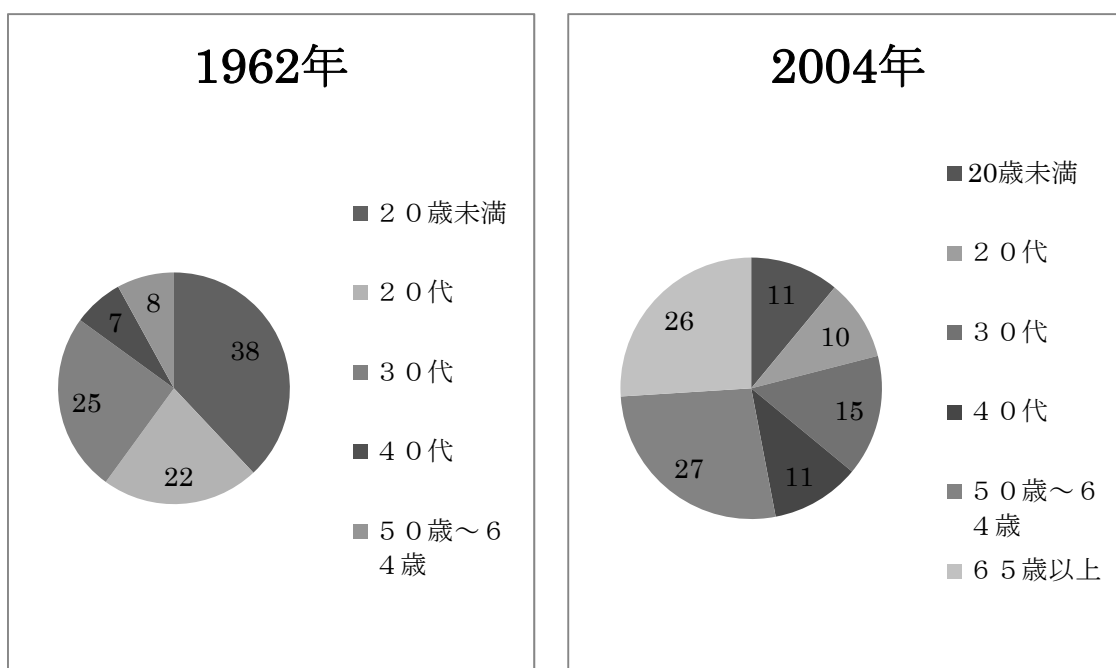
まずは、常盤平団地の基本情報を高度経済成長期の団地・ニュータウンブームなどとあわせて紹介したい。常盤平団地は1955年に日本住宅公団（現・都市再生機構）によって建てられた、大規模団地であった。これまで何度か述べてきたように、高度経済成長期における産業構造の転換、都市の労働力需要の拡大、豊かな都市へのあこがれによる特に若年層の向都離村現象により、都市における住宅の供給不足は深刻な問題であった。そのため、日本住宅公団が大規模な宅地開発を行い、常盤平団地もその一つであり、かつ非常に設備の整った憧れのニュータウンとして完成したのである。総戸数は4939もあり、団地の中に小中学校、郵便局、商店街までも備えたニュータウンとして華々しくデビューする。団地の中に小中学校があることから分かるように、入居者の多くは家族を持ち子供のいる20～30代の層であった。当時の常盤平団地の人気ぶりは以下のように表されている。

『“東洋一の団地”とうたわれた常盤平団地には、入居希望者が殺到し、なんと倍率は20倍を超えた。しかし最新設備を備えていただけに家賃も高く、2DKで5500円、1DKで4500円。しかも家賃の5.5倍の月収がなければ応募することさえできないという、ハードルの高さだった。ちなみに、当時の大卒初任給が1万4000円。今の大卒初任給19万6000円を基に換算すると、2DKには月給42万円以上という高級取りしか応募できなかったことになる。そのため当時の入居者の大半は、都心の大企業に勤める若いエリートサラリーマン層で、彼らは庶民の羨望を集めて“団地族”と呼ばれた。』¹⁴

しかし、日本住宅公団などによる大規模な住宅開発が一段落すると、民間のデベロッ

¹⁴ NHK スペシャル取材班・佐々木とく子『ひとり 誰にも看取られず』pp37

パーなどによる設備の良い集合住宅や分譲マンションなどが注目を集め、また所得の増加によるマイホームブームも起きた。これにより、団地は相対的にその価値を下げてしまうこととなる。それに追い打ちをかけたのが建物の老朽化による家賃の低下と高齢者層の増大であった。家賃が低下すると、かつて羨望のまなざしで憧れの的であった常盤平団地にも単身世帯が流入してくるようになる。また、団地の高齢化も進む一方であった。常盤平団地の入居開始は1960年であるから、仮に入居と同時に子どもが生まれた夫婦がいるとすれば、1980年代の後半には子供は独立するのが一般的である。子どもの独立と共にその夫婦が退去し、新しく若い家族が入居するのであれば常盤平団地は上手く世代交代ができ、孤独死が頻発することもなかったであろう。しかし、当たり前のことではあるが、子どもが独立した後もその親・夫婦は団地に残ることになる。また、老朽化と家賃の低下で、若い世代にとっても常盤平団地は魅力的な居住地ではなくなってしまった。これにより、常盤平団地は高齢化が進み、夫婦のどちらかが先に亡くなれば、その一方が単身者となり、単身世帯化が進んだのであった。ピーク時に2万人を超えていた住民は現在9000人を割っている。総戸数は約5000であるから、ピーク時に一世帯において4人家族だった家が、今や2人以下になっていることが分かる。まさに夫婦と子ども2人の家庭において、子どもが独立した後の数字を表していると言えるであろう。ピーク時には、当初設立された常盤平第一小学校は子供の増加に対応できなくなり、常盤平第二小学校、第三小学校と新設されたが、現在では生徒数が激減し教室は空きが多くなってしまっている。以下の表は常盤平団地の1962年と2004年の年齢別人口の比較である。



※常盤平団地40周年記念写真集「常盤平団地40年の歩み」

まず、若い世代について見ていくと1962年に全体の約4割を担っていた20歳未満の子どもは、2004年にはその三分の一以下の約1割になってしまった。驚くべきなのは、入居開始から2年後の1962年において、50歳～64歳の割合は1割を満たさず、65歳以上はなんと0%だったのである。それが、2004年においては、50歳以上が半数を超えているのである。このことからいかに常盤平団地が高齢化したかが分かる。実際に筆者は2度、常盤平団地を訪ねているが、数人の子どもにしか遭遇することができなかった。

4-2. 常盤平団地で起きた孤独死

では、次にどうして常盤平団地が孤独死問題に立ち向かっていくことになったのか。その経緯を追ってみたい。2007年に常盤平団地自治会と常盤平団地地区社会福祉協議会によって行われた、孤独死についてのフォーラムにおける資料から少し長いが抜粋する。なお、文中に登場する中沢とは常盤平団地自治会の会長で孤独死問題に中心となって取り組んできた中沢卓美氏のことである。

『常盤平団地で孤独死の課題に取り組むきっかけになったのが、2001年春に発見された、いわゆる「白骨死体3年経過」という出来事でした。団地1DKのダイニングキッチンの板の間で白骨死体となって発見されたAさん（男性、69歳）は、家賃を自動振替落としで払っていました。発見された時、警察署で検死の結果、「死後3年」ということでした。貯金が底をつき、家賃不払いとなり、現在の都市再生機構松戸住宅管理センターが家賃催促を出しても戻って来ることとなり、担当者がAさん宅を訪問して、警察署に連絡、Aさんの白骨死体を発見したという経緯でした。この時のAさん宅は1DKの家賃31700円、共益費1880円、合計33580円でした。いわばAさんは亡くなって白骨死体になってからも3年間、毎月33580円の家賃を払っていたこととなります。これは年間で、402960円となり、3年間で120万8880円となります。このほかガス代、電気代、水道代も払っていたのです。警察が白骨死体を運びだしたあと、Aさん宅のドアに同じ地区に住む民生委員がメモ用紙を玄関に貼りました。メモ用紙には「家族の方がお見えになられたら電話をしてください。」民生委員〇〇〇「電話××××」とメモ書きして。

担当民生委員の話：メモ用紙をメモ代わりにして貼りだすと、翌日、Aさんの弟さんから電話をもらって、Aさん宅を訪れました。弟さんと居合わせた妹さんがいうには、亡くなったAさんは5人兄弟で、家庭の事情で離婚して一人暮らし。「子どもはいるけど、子どもや兄弟姉妹と連絡はいつさいなし。本人は毎日のようにショウチュウをのんでいたようです。この団地にお世話になっていて、いろいろありがとうございました。兄の住んでいる1DKの合カギを私がつけていました」。亡くなったAさんの弟さんからの電話によると、「兄貴は変わった人だった。兄貴は親とも縁を切っていました。兄弟姉妹とも長い間、連絡することもなく、音信不通でした」。警察が1DKでAさんを処置

する際、弟さんと妹さんが立ち会ったとのこと。

近所の人と話：「近所の人とあいさつをするでもなく、こわい人というイメージでした」。

弟さんも妹さんも隣の市に住んでいました。

Aさんの死後、国勢調査が行われ、この地区を担当しているTさんから、地区長の中沢へ連絡。Tさんいわく「何回もなくヨルもヒルも、Aさん宅では、電気がついているし、メーターが回っているのに、本人が出てこない。どうしようか」と問い合わせ。まさか亡くなっているとは知らず、私はTさんに「仕方がない。Aさんを調査不能で書類を出すしかない」と指示をしました。この経緯を知った民生委員、地区社協関係者、自治会役員は、「白骨死体で3年経ち」と知り、みなあ然とするばかりで、事後の対策について、どうしたらいいのか、打つ手がわからないという状況でした。

ところが2002年4月上旬になると、団地1地区で、Bさん（男性、50歳）が亡くなっているのではないかと、というウワサが広がっていました。このウワサを知り、さっそく中沢が船橋の仕事場から電話作戦を開始。4階のBさんの向かいに住む高齢のおばあさんいわく「ベランダの網戸にいっぱいハエがとまるようになっている。どうしたんでしょうか。お隣さんのお父さんを最近見かけないし、変なおいがするんですよ。Bさんの下に住むCさんの話。「Bさんを最近、みかけないですよ。それに変なニオイがするのです。もしかすると……」同じくBさんの下に住むDさんの話「あれは亡くなった時のニオイですわ。それを思うと気味が悪くて……天井の部屋のシミからムシが落ちてくるような気がして……もうここから引っ越ししたいのです」。同じ階の人に次々と電話することにより、ある人とこんな会話をしました。「Bさんの奥さんの居場所を知っています」「教えて下さい」「いろいろ事情があって、別居しているのです」「そうですか。自治会としても、相談にのりたい」。

こんな会話があって、Bさんの別居中の奥さんと連絡がとれました。Bさんの奥さんの話によると「主人はこたつに入ったまま伏せるようにして亡くなっていました。こたつの回りには、お酒のワンカップやカップラーメンなどがたくさんころがっていました。後始末は便利屋さんに遺体の処理や部屋の消毒などお願いして80万円かかりました。家庭内暴力もあって、子どもを連れて、別居していたのです。私は夜働いて生計をたてていました。主人は会社のリストラで、会社を辞めて、次の仕事をさがしていましたが、思うような仕事がみつからなかった」。このような家庭の事情をお聞きして、奥さんと会話をしました。「奥さん、ご主人は生命保険に入っていないませんでしたか」「若い時に（生命保険に）入ったとききました。が、証書がどこにあるか知りませんが……」「押し入れとか、書類入れの中をよくみて下さい」

（あくる日、奥さんから電話があり）「（保険の証書が）ありました」「どこの支店になっていますか」「〇〇支店です」「よし、私の方から、〇〇支店長に電話して保険金をすぐ出すようにしてもらおうから……」「お願いします」

（自治会長名で〇〇支店長にお願いして）「奥さん、〇〇支店長に頼んであるから、あ

す、〇〇支店へ、印鑑とボールペンをもって訪れて下さい」「はい、わかりました」翌日の午後、奥さんから連絡が入り「(〇〇支店に)行ってきました。保険金が2000万円ありました。助かりました」「それはよかった。自治会としていろいろ相談にのりますので、がんばってください」。こんなやりとりをして励ました、という経緯をたどりました。私たちにとって、この二つの出来事が貴重な大きな経験となり、大きなきっかけにもなりました。』原文ママ¹⁵

以上が中沢氏を中心に常盤平団地が孤独死問題に向き合っていくきっかけとなった出来事である。長々とその出来事について記載したのは、この二つの孤独死の報告が今まで述べてきた孤独死の問題点をいくつか含んでいるものであったからである。まず、亡くなったのは2人とも男性の単身者であった。Aさんは親と縁を切り兄弟とも音信はなく、Bさんはリストラや家庭内暴力などで奥さんと別居中、と2人とも近所の人と交流したりしないタイプであったことは容易に想像がつく。地域社会との「縁」を無くし孤立してしまう人は大きく分けて二つに分かれる。一つは、地域社会との縁を望みつつもその機会もなく孤立してしまう消極的孤立者、もう一方は自ら孤立している状況を受け入れ改善しようと思わない積極的孤立者である。この2人は積極的孤立者の典型例であり、彼らの孤立を防ぐのは非常に難しい問題である。また、お酒を多量に飲んでいるというのも男性の孤独死に多くあるケースである。また、Bさんの遺体の処理や部屋の消毒を行った「便利屋さん」も注目に値する。この便利屋さんこそ、村落的生活様式から都市的生活様式への移行の中で生まれた専門家である。もし、遺体の処理や部屋の消毒を行う業者などがなく、周辺住民や自治会などが自分達でやらなければいけないとしたらどうなったであろう。彼らは地域社会で共同してことにあたらなければならないし、また決して進んでやりたいことではないから、孤独死の防止に力を尽くすだろう。そうすれば、昼も夜も電気がついているような家を三年間も見逃すことは起きないであろう。

4-3. 孤独死への取り組み

では、常盤平団地は具体的にどのような対策を行ったのであろうか。その中心は、民生委員、団地社会福祉協議会、常盤平団地自治会、ボランティアの連携で作られた「まつど孤独死予防センター」と「孤独死ゼロ作戦」である。主な取り組みについて以下に挙げ、簡単に説明していく。「まつど孤独死予防センター」は孤独死の「予防」を目的とし、最悪の場合でも「早期に孤独死を発見する」ことが目標とされている。また、孤独死を予防する最も有効な方法は、「地域社会において崩壊してしまったコミュニティを再生し、住民同士のつながりを作ること」と「孤独死ゼロ作戦」の中で掲げられており、その方向で取り組みが行われている。このことこそ、本論文において常盤平団地を事例研究として扱った大きな要因でもある。

¹⁵ 「孤独死ゼロ作戦」5年目の統括

- ・孤独死110番の開設

「隣の様子がおかしいと感じたら、孤独死110番へ」というキャッチフレーズと共に始められた緊急通報システムである。先ほど述べたように「孤独死ゼロ作戦」は住民のつながりを作りそのセーフティネットによって、孤独死を予防し、早期に発見するのが特徴である。よって、住民が隣の住民などに対して「何かがおかしい」、「いつもと違う」など感じたときに緊急に通報できるように設置された。自治会報「ときわだいら」で繰り返し住民に協力を求めるなどし、浸透している。

- ・新聞販売店と協定

孤独死を発見した時のきっかけとして多くあるのが、郵便ポストがいっぱいになって溢れておりその家になにかあったのではないかと通報があるケースである。それに注目し、基本的に毎日届けられる新聞の配達員に協力を要請したのがきっかけである。常盤平団地の周辺に店を持つ各主要新聞販売店・代理店と協定を結び、異変を感じたら通報を受けることになっている。

- ・「福祉よろず相談室」の開設

人は誰でも多少なりとも悩み・問題を抱えているものである。村落的生活様式から都市的生活様式に移行し、地域社会において共同で解決していた問題は専門家が解決するようになった。しかし、専門家がすべての問題を解決できるわけではなく、経済的な面などから専門家に頼むことが出来ない場合もある。そこに注目し、孤立して誰にも相談できなかつた人を助け、それと同時につながりをもたせることで孤立から脱してもらおうというのが「福祉よろず相談室」である。実際に、悩みの抜本的な解決ができないケースもあるが、相談を機にボランティアに参加する人が増えるなど、孤立者を防ぐという観点からは成果が出ている。

- ・「挨拶運動」「向こう3軒両隣」の実施

「孤独死ゼロ作戦」は住民同士のつながりを作り、コミュニティを再生することをその手段として掲げている。その初めの一步が、近所同士で挨拶をしようという「挨拶運動」と隣近所と顔見知りになろうという「向こう3軒運動」である。「たかが挨拶」と思われるかもしれないが、「されど挨拶」である。また、常盤平団地は孤独死対策にいち早く取り組んでいることから何か特別な秘策があるのではという気にもなるが、そうではない。孤独死がこれほど社会問題になる中で、それに対する特効薬はなく「挨拶」という地道なところから初めていかなければならないのである。私自身も住民同士の挨拶が重要だなと感じた出来事がある。私の家の斜め前には中年の夫婦が住んでいるが、当初はまったく面識がなかった。しかし、普段から挨拶だけはするようにした結果、その家が朝、家の回りを掃除するときに、私の家の回りも掃除してくれるようになった。このことのお礼を言うため挨拶の後に一言・二言加えていたら、やがて普通に挨拶とコミュニケーションをするようになった。残念ながら、私の家は隣3軒、前3軒との挨拶は完全にできていないので、私自身もしっかりやりたいと思う。実際に、常盤平団地でどの

ような効果があったかは、聞き取り調査したものを後にまとめて述べたいと思う。

・「いきいきサロン」の開設、催しの開催

団地の中で気軽に立ち寄って会話を楽しんだりする場所を作ろう、というコンセプトでできたのが「いきいきサロン」である。一人100円でコーヒーやお茶などが飲み放題で、自治会や団地社協のメンバーが2人常駐している。ここでは、特に高齢者を中心に談笑したり、常駐するメンバーなどへの相談をしたりと、憩いの場となっている。また、定期的に催しなども行われている。私が訪れたときは、高齢者を中心に12人の方がいらっしゃったが、他にも見学者がおり常盤平団地においても非常に有名な施設である。

5章：孤独死が地域社会を変えられるか

5-1. 地域社会は孤独死にどう立ち向かっていくべきか

これまで「孤独死とは何か」「孤独死を引き起こした要因は何か」「常盤平団地はどのように孤独死と向き合ってきたのか」について、説明してきた。では、「孤独死を無くすには、予防するには、減らすにはどうすればよいのであろうか。」これまでの本文で方向性はすでに示されているが、「地域社会で孤独死に向き合う」というのがその答えである。逆に言えば、この社会問題にもなっている孤独死を機に、地域社会は変わらなければいけないのである。そして、新しい地域社会において孤独死に立ち向かっていくことが必要なのである。震災による仮設住宅での診療で孤独死と接してきた額田氏は以下のように指摘している。

『これまで孤独死対策として、ボランティアを中心に安否確認と称する戸別訪問の方式が精力的に繰り返されてきたが、ことあるごとに華々しく報道されてきたそんな方法論は、孤独死防止に決定的な役割を果たすとはいえないことがわかってきた。むしろ住民をすべて孤独死の対象とみなすようなやり方について、「私たちは毎日生命が確認されねばならない存在か」と、じゅうたん爆撃的な方法に対し抗議めいた声があがっていた。仮設診療所の看護婦たちも、生命と健康の情報収集をかねてかなり精力的に戸別巡回をやってきたが、それはあくまでも一過性、瞬発的な域をでるものではない、と反省を迫られた。結局、毎日毎日の単調な生活の繰り返しの中で力を発揮するのは、なんといつでも住民相互の持続的な人間関係である』¹⁶

このようにボランティアなどによる見守りなど持続的でない取り組みでは、一時は良いが根本的に孤独死を無くすことはできない。では、住民相互の持続的な人間関係を作り上げるために、どのような地域社会が必要となってくるのであろうか。本論文の題目にもあるように、どのようにすれば地域社会は孤独死のセーフティネットとなれるのであろうか。

まず挙げられるのが、消極的孤立者を作らない地域社会である。孤立者の中に、地域社会との縁を望みつつもその機会もなく孤立してしまう消極的孤立者、自ら孤立している状況を受け入れ改善しようと思わない積極的孤立者がいる。その中で、消極的孤立者を作らないような地域社会、消極的孤立者が地域社会でつながりを作れるような機会が必要である。消極的孤立者を防ぐには、二つの地域社会が可能性として考えられる。一つ目は、「つながりが欲しい」と思った時にそれを作る場を提供する地域社会である。このような地域社会は、非常に緩やかな関係において人とつながることを好む私たちにとって有効であろう。地域でサークルのようなものを起こす、気軽に談笑できる場所を作る、などの活動が考えられる。このような場を提供できているという面において、常盤平団地の「いきいきサロン」は非常に価値があるのではないか。だが、これらの地域社会のつながりは必要性という観点で不安が残る。必要性のない分、どうしても多くの

¹⁶ 額田勲「孤独死 被災地神戸で考える人間の復興」pp226~227

人を巻き込む推進力に欠け、活動団体もだんだんメンバーが固定化されるなど改善点も多い。もちろんメンバーが固定化することは、そのメンバーがその活動に根付いたことを意味するから好ましいことであるが、固定化と共に新たなメンバーが入ってこない意義を半分失ってしまうこととなる。「いきいきサロン」においても、メンバーの固定化傾向が見られており、いかに新しい人、初めての人に利用してもらうかは課題として残ったままである。

二つ目が、村落的生活様式から都市的生活様式の中で失われた共通の課題を持つ共同体を部分的にはあるが取り戻した地域社会である。都市的生活様式において個人で解決できない問題は専門家が解決してきたが、専門家が解決できない問題もある。また、経済的な事情などで専門家に頼めない場合もある。そういった課題を中心にして、地域社会でつながりを作ろうというものだ。これは、一つ目と比べて必要性が多少なりとも存在するため、目指すべき地域社会のあり様としてふさわしいものではないか。しかし、村落的生活様式に近いような時計の針を逆にする変化は不可能かつ望まれておらず、そのさじ加減は難しい。

5-2. 地域のつながりの再構築（セーフティネットは再構築できたのか）

5-1. における地域社会のあり方を踏まえつつ、実際に地域社会は孤独死のセーフティネットとなるべく変わっていきけるのか、を常盤平団地へのフィールドワークなどを基に検証していきたい。常盤平団地の「挨拶運動」「向こう3軒運動」により、常盤平団地では少しずつではあるがコミュニティが出来あがっていた。その例を取材したものも含めていくつか紹介したい。

・単身で住む女性のAさんは「挨拶運動」により隣の家との交流が生まれた。そのため隣の家の方Bさんの夕刊を自分が取りに行くついでに取り、届けるのが日課になっていた。ある日、Bさんから「自分の夕刊を取るついでに私の夕刊も取ってきてくれる女性が今日は来ない」という電話がセンターにきた。民生委員が現場に駆けつけた結果、高熱で意識を失い、転倒し動けなくなっていたAさんを発見し事なきを得た。もし、この時Bさんによる通報が無ければ、Aさんも孤独死してしまっていたかもしれない。

・単身で住む女性のCさんは、「いきいきサロン」に通った結果、仲良い4人の女性グループができ、一緒に自治会が行っているボランティア活動に参加している。その結果、さらに友達の輪が広がり今では民生委員などを補佐する仕事もするようになっている。

・単身で住む男性のDさんは、足が不自由になりなかなか買い物に行けなくなった。かといって、インターネットなどもなく通販などを頼むことも難しい。そんな中、隣に住む単身の女性と挨拶を交わすうちに、その女性が通販システムを利用していることを知り、定期的と一緒にDさんの分も頼んでもらうことに。お礼としてDさんが料理を女性に届けるなど、通販を頼む以外での交流も起きているとのこと。

このように、少しずつではあるが常盤平団地の地域社会は孤独死のセーフティネットとなれるような状態に変わってきている。「まつど孤独死予防センター」の方も、センターが出来た当初は住民間の交流など見られることもなかった。しかし、「挨拶運動」「いきいきサロン」など確実に常盤平団地は変わってきているとおっしゃっていた。実際に、10人の方にアンケートを取ったところ全員が「孤独死に対する取り組みを始めて以来、住民同士の関係に変化があることを実感する」と答えている。また「いきいきサロン」の常連さんが民生委員になるなど、良い循環も生まれている。

残念ながら今でも常盤平団地では孤独死が起きている。しかし、割合は減り、以前は白骨死体が3年以上放置されるような状態だったのが、今では3日以内には発見できるようになっているという。この「3日以内の発見」という事実が、地域社会がセーフティネットとして機能していることの証明になるかと言えば、それは人それぞれ考えがあるであろう。私は地域社会がセーフティネットとして機能し始めていると捉えたい。3日以内の発見には、洗濯物が出たまま、郵便ポストが溜まっているなどの通報による発見がある一方で、毎日挨拶をする人が今日はいない、一緒にお茶をする約束だったのに出てこない、決まった曜日に「いきいきサロン」に来るのに来ない、など住民同士のつながりにより発見できたケースが多くあるからである。

常盤平団地の他にも地域社会でコミュニティを再生することに成功している事例がある。それが、神奈川県横須賀市にある分譲マンション「ソフィア ステイシア」である。ソフィア ステイシアは「よこすか海辺ニュータウン」の中にあるマンションである。ステイシアでは、孤独死や防犯などの面で住民同士の顔も分からない状態が懸念され、管理組合の呼びかけで「挨拶運動」が始められた。ここでユニークだったのは、住棟ごとに住民を集め、自己紹介と写真撮影を行うようにし、「挨拶運動」を円滑に進められるようにしたのである。これにより住民同士の交流が生まれ、見守り活動や防犯パトロールなどが開始された。また、孤独死防止という観点からは高齢者サークル「長寿会」が作られ、体操や絵手紙などのサークル活動が行われている。この「長寿会」において注目すべきは、高齢者だけでなく若年層を巻き込んで活動をしている点だ。また、それぞれの悩みに対するマッチング機能があり、「足が不自由で、病院に行くのが一苦勞」という高齢者がいれば若年層の中から「車で病院まで送ります」という人が申し出て、マッチングをして交流を行う仕組みが成り立っている。これは、5-1. で述べたような地域社会での部分的な村落的生活様式の導入に近く、まさに地域社会が孤独死だけでなく様々なセーフティネットとして機能していることを表している。

都営住宅「戸山団地」ではNPOを中心に地域社会でのつながり作りが行われている。都営住宅「戸山団地」は高齢化率が47.7%として都会の限界集落と呼ばれる団地である。JR山手線新大久保駅と総武線大久保駅から徒歩5分という都会のど真ん中でありながら孤独死が起き、その対策を迫られていた。しかし、行政側は「シルバーピア」という「高齢者向け設備&サービス付き公的賃貸住宅」で対応しているため、NPOによ

る地域のつながり作りが行われているのである。NPO 法人「人と人をつなぐ会」では、「見守りケータイサービス普及活動」や「住民同士が交流する場の提供」など活動を行っている。サークル活動は広く普及しているが、戸山団地のような多くの世帯が住む団地においてすべての住民を網羅することは難しく、メンバーの固定化にも頭を悩ませている現状もある。その点、総戸数309の「ソフィア ステイシア」のような場所の方が、うまく地域社会でのつながりを作れていると言えるだろう。

5-3. 孤独死予備軍を作らないためには

国立社会保障・人口問題研究所によると2030年には単身世帯は37.4%にまで急増する。これからの日本はますます少子高齢化が進み、それと同時に孤独死する可能性のある人「孤独死予備軍」も増えていくことは容易に想像できる。では、孤独死予備軍を作らないために地域社会ができることは何か。孤独死に立ち向かう地域社会という枠組みに高齢者だけではなく若年者を含めることが重要ではないか、と思う。

常盤平団地の「いきいきサロン」である話を聞いた。ある高齢者の女性が「挨拶運動」によって顔見知りになった隣の世帯は、幼い子どもを子育てしていた。その女性は自分の子育ての経験などから様々なアドバイスをし、子育てに悩むこともあった隣の主婦は女性に積極的に相談するなど交流が続いている。最近では、たまに一緒に食事をしたり、女性が子どもを預かったりし、その女性が生活にハリが出たと喜んでいるという話であった。このように世代間交流を続けることによって、孤独死予備軍を減らすことができる。常盤平団地ではまだ仕組みとして成り立ってはいないが、「ソフィア ステイシア」では先ほど紹介したマッチング機能のように世代間交流が生まれる土壌が出来あがっている。

5-1において、村落的生活様式から都市的生活様式の中で失われた共通の課題を部分的に復活させることが孤独死を防ぐのに有効だと述べた。孤独死予備軍を作らないためにも、課題を作るというやり方は重要である。その課題としては、集合住宅で居住のルールを作るようなケースもあれば、防災への対策というようなケースもあるだろう。必要なのは、地域社会で課題を共有するプロセスを作り上げることである。常盤平団地や「ソフィア ステイシア」の例にもあるように、強力なリーダーが中心となって地域社会のつながりを創出しているケースがほとんどであり、逆に言えばリーダーが不在だと難しい。そこで、強力なリーダーのいない地域社会でも簡単に作れるようなプロセスを構築し、広く公開することが必要だろう。

6章：論文のまとめ

6-1. 論文の統括

1章：はじめに

問題意識：地域社会の希薄化が深刻となっている中で、孤独死は社会問題になっている

研究目的：地域社会は孤独死のセーフティネットになれるか

今の段階において地域社会がセーフティネットになれていないことは明白なので、「地域社会は孤独死のセーフティネットになるべく変われるか」を研究

仮設：地域社会の変容こそ孤独死が社会問題化した原因である

2章：孤独死の基礎研究

- ・「有縁社会」から「無縁社会」になり、孤独死が増加
- ・地域社会で「縁」を作ってこそセーフティネットになる
- ・昔から存在する孤独死が今クローズアップされる理由
- ・孤独死はどれくらい起きているのか

なぜ「無縁社会」になっ
てしまったのか

地域社会での「縁」を作
る取り組みを探る

3章：孤独死問題から見た地域社会

- ・なぜ、単身世帯は急増したのか
- ・都市的生活様式における強制的なつながり「縁」の崩壊
- ・地域社会というコミュニティを選ばずとも生活できる現状

4章：地域社会の孤独死対策(常盤平団地)

- ・「孤独死ゼロ作戦」は「コミュニティ再生作戦」とイコールである
- ・消極的孤立者の受け皿を作る
- ・まずは「挨拶」から始め地域社会における住民のつながりを取り戻す

5章：孤独死が地域社会を変えられるか

- ・住民同士のつながりこそ孤独死への唯一の解決策
- ・つながりを取り戻し、「有縁社会」へと地域社会は変わっている
- ・地域社会がすることで、地域社会はセーフティネットに成りえる

以上の図が、本論文の構成と論点を簡単にまとめたものである。まず、本論文では地域社会の希薄化というテーマからそれを映し出す社会問題として「孤独死」に着目した。この裏に「地域社会の変容こそが孤独死が社会問題化した要因である」という仮説が存在する。文中ではこの仮説をじっくり検証することはしなかった。なぜなら、文脈の中で十分に検証し証明されていると考えたからである。実際、地域社会の変容によってかつての「有縁社会」から「無縁社会」へと地域社会が変容し「つながり」「縁」を失うことで孤独死が起きるといふ流れで仮説は説明できていると思う。また、研究目的としては「地域社会が孤独死のセーフティネットになれるか」というテーマを設定した。孤独死への対策は至る所で多々見られるが、地域社会が孤独死に対策をとっていくケースを研究するのは思った以上に大半なことであった。詳しくは本論文の意義のところ記述するが、孤独死の対策をハード面に頼る動きは思った以上に多い。そのハード面の動きがあまり功を成していないところがなんとも残念ではあるが。

2章では、孤独死の基礎研究と題して孤独死の基本的なことについてまとめた。ここで気をつけた点は「孤独死の発生件数」など具体的な事実を紹介しつつも、数字などだけではなく地域社会に焦点を当てて記述することである。その中で古くから孤独死は発生しているにもかかわらず、今現在において社会問題となり注目されている原因を探った。これには、以前は「生活の中での例外としての孤独死」であったのに対し、現在では「誰にでも起こりうる孤独死」になってしまったことが関係していた。この孤独死が「誰にでも起こりうる」状態を作りだしたのが、「有縁社会」から「無縁社会」への変化であった。ここで「孤独死に立ち向かうには、その要因となった地域社会の変化を変えるしかない」「地域社会において緩やかにでも有縁社会、住民同士のつながりを取り戻すべきだ」という指針が出来あがった。この指針を実現するために、「無縁社会」を作りだしてしまった地域社会の変容を整理しようというのが次の章である。

3章ではなぜ地域社会が「無縁」になってしまったのか、孤独死が問題となったのか、その変容を追った。まず、孤独死の多くが単身世帯であることからなぜ、単身世帯が増したのかについて分析した。その後、孤独死を生み出すような地域社会の誕生の原因として「村落的生活様式から都市的生活様式への転換」「コミュニティが変化し、近所づきあいが減少している」について分析を行った。この章での論点は、従来強制的なものであったコミュニティ・縁が無くなった時に、自ら主体的にコミュニティ・縁を選ばずに「無縁」になってしまったということである。よって、この後の4章、5章では孤立者が縁を選び、住民同士でつながりを作りだせるような機会、仕組みを作ることが重要になってくる。その仕組みこそが、「新しい地域社会のあり方」である「孤独死のセーフティネットとして機能できる地域社会」であるのだ。

4章では主に松戸市の常盤平団地の事例を中心に、孤独死といかにむきあっていくべきかについて考察した。ここで重要なのは、常盤平団地が「孤独死を無くすこと＝孤独死ゼロ作戦は、コミュニティの再生によってのみ成し遂げられる」と考えている点であ

った。なぜなら、この考えは私が2章においてたてた指針である「孤独死に立ち向かうには、その要因となった地域社会の変化を変えるしかない」「地域社会において緩やかにでも有縁社会、住民同士のつながりを取り戻すべきだ」というものと共通するからである。

5章では常盤平団地の事例や3章における地域社会の変容を踏まえつつ、実際に地域社会がどのように変わっていったのか、についてまとめた。そこには住民同士のつながりで孤独死に立ち向かっていく事例が見られ、一定以上の効果をあげているのではないかと私は考える。5章の最後において「まとめ」をしていないが、それについては次の論文の意義のところでも述べたいと思う。

6-2. 論文の意義

浦野先生はゼミ生に論文を書く際のポイント・アドバイスとして「人に注目する」というのを常々おっしゃっておられる。それは「人こそが社会を動かしていて、人に注目することでその歩みや動きが分かる」ということであろう。しかし、本論文において「人に注目する」のは難しいことだった。私が孤独死を契機に地域社会の希薄化について調べてみようと思ったのも、孤独死を防ぐことができるのは「地域社会」「地域社会の住民」つまり「人」であると思ったからである。もちろん、本文でも触れたように最低限は孤独死に立ち向かう「人」に着目できたとは思っている。しかし、私が本論文を書く前に描いていた青写真とはだいぶ違うものであった。

都営戸山団地において見学させていただいた65歳以上の高齢者専用住戸である「シルバーピア」は、衝撃的であった。シルバーピアでは、緊急通報装置がキッチン・風呂・トイレの三か所に設置されていて、緊急時には団地内に住んでいる生活援助員と話ができるようになっている。居間には、消防署に通じている緊急通報ボタンもある。このシルバーピアは国の「シルバーハウジング・プロジェクト」東京都の「シルバーピア事業」の一環であり、戸山団地には100戸ある。このように孤独死対策をハード面に依存する動きはなお加速している。コミュニティの再生によって孤独死ゼロを目指す常盤平団地の「まつど孤独死予防センター」の取り組みの中にもハード面の取り組みは存在する。

しかし、「シルバーピア」の例からも分かるようにハード面だけでは結局すべてを網羅するまでには届かない。また、網羅したとしてもそれは抜本的な解決にはならず、いたちごっこ的な面が強い。そう考えると、私は本論文において「孤独死を解決できるのは地域社会によるセーフティネットである」「地域社会のつながりこそ求められている」「地域社会は求められている姿に変わることができる」という思いをより強くした。浦野先生の言うように「人」が人間関係の中で解決していかなければならないのである。

残念ながら、孤独死対策において今後もハード面の取り組みは多く行われるであろう。しかし、それには限界がある。そこで本論文が示したような、地域社会のあり方を模索

する動きが広がれば私としては非常に嬉しい。また、それこそ「地域社会が孤独死のセーフティネットになれる」と結論づけた本論文の意義にもつながるであろう。

6-3. おわりに

本論文執筆にあたり、浦野正樹教授には様々なご指導賜りました。また、常盤平団地の皆様、自治会の皆様、都営戸山団地の皆様には快く調査にご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

参考文献・資料

朝日新聞「孤族の国」取材班（2012）『孤族の国：ひとりがつながる時代へ』朝日新聞出版

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（2010）『無縁社会・無縁死三万二千人の衝撃』文藝春秋

額田勲（1995）「孤独死 被災地神戸で考える人間の復興」岩波書店

高橋勇悦編（1997）『テキストブック社会学（5）地域社会』有斐閣

橋本俊詔（2011）『無縁社会の正体』PHP 研究所

栗田靖之編（1987）『現代日本文化における伝統と変容3日本人の人間関係』ドメス出版

島田裕巳（2011）『人はひとりで死ぬ』NHK 出版

中沢卓美・淑徳大学孤独死研究会（2008）『団地と孤独死』中央法規

三好和代・中島克己編著（2008）『21世紀の地域コミュニティを考える』

山崎丈夫（2009）『地域コミュニティ論：地域分権への協同と構図』自治体研究社

川口清史・大沢真理（2004）『市民がつくるくらしのセーフティネット』日本評論社

松原淳子（2010）『おひとり死』河出書房新社

大山真人（2008）『団地が死んでいく』平凡社

三浦文夫（2007）『図説高齢者白書2006年度版』全国社会福祉協議会

嵯峨座晴夫（1997）『人口高齢化と高齢者』大蔵省印刷局

財団法人 東京市政調査会（2011）『「消えた老人」はなぜ生まれるのか』

藤森克彦（2010）『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版社

内田康人（2012）『変わりゆくコミュニケーション薄れゆくコミュニティ』ミネルヴァ書房

NHK スペシャル取材班・佐々木とく子（2007）『ひとり 誰にも看取られず』阪急コミュニケーションズ

内閣府ホームページ <http://www.cao.go.jp/>

総務省ホームページ <http://www.soumu.go.jp/>

東京都監察医務院ホームページ

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kansatsu/index.html>

常盤平団地自治会 <http://www.ne.jp/asahi/toki/jiti/>

NPO 法人「人と人をつなぐ会」 <http://npo-ppj.com/index.html>

株式会社 コレクティブハウス <http://ch-i.net/>

朝日新聞朝刊 1970年4月16日、20日朝刊 1987年11月11日朝刊

読売新聞朝刊 2012年5月17日、18日、22日朝刊